「日々の理科」（第 348 号） 2015（H27),-6,16

「シジュウカラの子育て」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

今年のシジュウカラの巣箱では、９羽のヒナが全部育って無事に巣立ちを迎えた。狭い巣箱の中に９羽もいると、子育てもなかなか大変である。その一部を紹介したいと思う。

ヒナがまだ小さく、羽毛が生えそろっていないうちは、親鳥（メス）は一晩中巣箱の中にいる。産座（卵やヒナがいる窪み）の上を覆っている。体温維持が難しい、ヒナの保温が主な目的である。５月下旬とはいえ、この時期の北軽井沢は、明け方には 10℃以下になることがある。

ヒナがだいぶ育ってくると、夜間、親鳥は巣の外で過ごすようになる。ヒナたちは、産座の中で一かたまりになって過ごす。この時期、24 時間、何があっても産座からヒナが出ることは絶対にない。

ヒナが 5～6 羽の場合は、主として母親鳥が世話をし、父親鳥は巣箱の入口まで餌を運んでくることが多い。しかし、今回は９羽の世話なので、それでは間に合わず、父親鳥も頻繁に巣箱に出入りしていた。

狭い巣箱の中で、一番の問題は、ヒナたちの排泄物である。そのままにしておくと、巣箱の中はヒナたちの糞だらけになってしまう。餌をもらったヒナは、必ずお尻を持ち上げて糞を出す。それを親鳥がくわえて、巣の外に持ち出す。（ヒナが小さいうちは、親鳥が飲みこんでしまう）こうした行動も、巣箱にカメラがあってこそ、観察できることなのだ。